

事例3：中学校1年生 自己概念の変容で、登校へ気持ちが向き始めたC子



C子は、中学1年生の2学期にクラスの男子生徒に、「お前なんか学校に来るな」と言われた。それ以来、自分はクラスの男子生徒から嫌われていると思い込み、男子生徒に嫌悪感をもつようになった。そして、C子は中学1年生の11月から登校をしぶり始め、継続して休むようになった。中学1年生の1月から教育センターで援助を開始し、4月から徐々に登校するようになった。

周辺の状況

両親と高校2年生の姉とC子の4人家族。近所に母親の祖母がおり、行き来をしている。姉は、活発で成績も上位である。保護者や祖父母からの信頼も厚い。C子はおとなしく、成績は中程度である。友達関係がうまく築けず、友達も限られている。小学校時は、母親が学校まで送って行き、なんとか登校していた状態で欠席も多かった。

母親は、C子に過干渉・過保護であり、C子は母親に依存していた。



児童理解

両親や祖父母は、C子と姉をいつも比較して評価することが多かった。両親や祖父母は、励ますつもりで「お姉ちゃんはクラスで3番だったよ、C子も頑張ればできるのよ」などと言葉掛けをしたり、「ピアノを習いなさい」、「塾に行きなさい」など、積極的に活動するように指示的なかかわりをしてきた。C子は次第に劣等感をもち、自分に対する自己肯定感が低い状態となっていた。その矢先に、男子生徒の言った言葉に傷付き、男子生徒全員から拒否されていると感じて、教室に居場所を見いだせなくなったものにとらえられる。

指導・援助の方針

※ (セ)は、県総合教育センターの援助 (学)は、学校での指導・援助

- 1 家族関係を改善して、家庭におけるC子の居場所の確保をする。(セ)
- 2 C子の得意なもので自信付けを行い、C子の肯定的自己概念を形成する。(セ) (学)
- 3 校内支援体制を確立し、学級以外の場所で安心できる居場所を確保する。(学)
- 4 部活動の男子生徒と交流させ、C子の人間関係における抵抗感を軽減する。(学)
- 5 学級での居場所を確保する。(学)

<指導・援助の経過>

1 家族関係の改善と居場所づくり

保護者は、「学校に行きたくない」と言うC子を、小学校のときのようにしかったり、怒ったりして登校させようとしてきた。しかし、「死にたい」、「学校が怖い」、「お母さんが怖い」と言っていて泣き出し、動こうとしないC子に、保護者はどうかかわっていいのか分からず、心理的に不安定な状態だった。

そこで、C子の状態は子どもの成長過程においては誰にでも起り得る可能性のあることを説明し、保護者の不安感を軽減するようにした。また、これからのC子に対する保護者のかかわりとして、姉と比較することを止め、C子に考えさせ、自己決定することを待つように助言した。また、C子の気持ちが落ち着くまで、登校への誘い掛けはしないように依頼した。保護者のかかわりが変わったことで、C子の保護者に対する恐怖感が軽減され、家で安心して過ごせるようになり、保護者に自己主張することができるようになった。

2 肯定的な自己概念の形成

C子は、教育センターの担当者とスポーツや遊びをしたり、日常の話をしたりして過ごした。担当者とC子の信頼関係が深まってくると、C子は小学校時代に受けたいじめについて話したり、保護者から自分だけが厳しくしかられたように感じていたことなどを話したりした。そして、学校が楽しくなかったので、登校しなくなかったことなども話した。だんだん元気を取り戻したC子は、作詞や作曲をして披露してくれたり、家庭教師と学習したりするなど、活発に活動し始めた。徐々に学校のことを自分から話すようになり、友達へ電話をかけたり、外に出て一緒に遊ぶようになったりしてきてきた。

<ポイント>

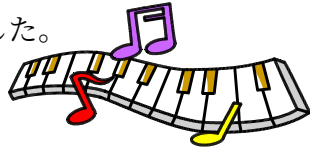
① 保護者は不登校になった原因を探し、自分の育て方が間違っていたのだろうかとか自分を責め、心理的に不安定な状態になることが多い。そんな保護者の気持ちを考え、丁寧に話を聴き、不安感を軽減する必要がある。また、保護者が子どもの成長過程について理解できておらず、子どもの個性や成長段階を考えずにかかわってしまうことがある。そのため思春期においては自立への欲求と親に依存したいという欲求との葛藤で、不安感をもつ子どもが多く見られる。

C子については保護者から受け入れられていることを感じるようになり、また自己決定して行動することにも自信をもち始め、自分の気持ちを素直に表現することができるようになった。

② 「自己概念」とは、自分で自分自身をどのようにみているかという、半ば固定的、持続的な自己像のことを言う。これは、重要な他者（親、教師、親友など）の評価を本人が摂取したり、経験を内在化したりすることによって形成される。自己概念によって、行動や反応が規制されることになる。否定的な自己概念をもった子どもには、親や教師のような重要な他者が、子どもの長所や得意なものを見付け、繰り返し褒めて認めることが大事である。

C子については、「自分は、何をやってもだめな子ども」だという否定的な自己概念をもっていたが、自分の意志で作詞・作曲し、それを披露することで周囲

母親は、C子の状況について担任と頻繁に連絡を取り合っていた。母親は、C子が学校への興味をもち始めたことを報告した。



3 学校での居場所づくり

学校への興味をもちはじめたことを聞いた担任は、電話で教育センターに今後の学校の支援体制について助言を求めた。その助言を参考にC子への支援体制について話し合い、全教職員で対応することを共通理解した。そして、担任はC子に登校への誘い掛けをすることにした。C子は自分で登校の方法を希望し、保健室や心の教室、空き教室などに登校し、空き教室を自分で整理したり養護教諭や相談員の手伝いをしたりして過ごした。

4 友達との関係づくり

担任はC子の部活動の顧問と連携を図り、部活動に誘ってもらうようにした。また、部活動の生徒にはC子が気軽に参加できるように、温かい態度で接するように援助してほしいことを事前に指導してもらった。C子は、部活動の友達との交流から、徐々に生徒間の人間関係に対する抵抗感が軽減されて部活動の友達との関係が深まった。

C子は気軽に部活動に参加し、外部との練習試合に参加するようになった。そして、担任以外の教師にも自分から話し掛け、心を開いていった。

5 学級における居場所づくり

担任は、C子を学級の一員として迎えらるるように事前指導を行った。C子が時々授業に参加しても、普通に振る舞い、特別視してかわらないようにさせた。また、学級でのグループづくりなど、C子の抵抗感の少ない生徒で編成するなどした。そして、C子の作詞・作曲の歌などを披露し、C子に対する理解を深めるようにした。

C子は徐々に学級で過ごす時間が増え、教室で授業が受けられるようになった。

から認められ、「自分も出来る、だめな子ではない」という肯定的な自己概念に変わっていった。

③ 学校への誘い掛けは、本人の状況を見極めてから行わなければ、効果が上がらないばかりか、逆に状態を悪化させることにもなりかねない。なお、学校的话题を意識して行うなどの軽い誘い掛けからいつ・どのようにして登校するかなどの具体的なものまで、様々な誘い掛けがある。

C子については、具体的な誘い掛けにも抵抗が少ない状態だったから、誘い掛けに応じて登校できるようになった。

④ この時期は、再登校への意欲が出てきたとは言え心理的不適応の状態にある。心理的に安定するまでは本人の希望により、抵抗感の少ない友達との交流から始めるとよい。

C子については、部活の生徒とは好きな活動を通して共通の話題があり、男子生徒に対しても比較的話し易く、不適応感も軽減された。

⑤ 再登校し始めた子どもたちが一番嫌だったことは、学級の子どもたちや先生たちから特別な扱いをされたことだと答えている。「どうして休んだの」、「元気だった、登校できてよかったね」など、不用意な言葉掛けをしないように、自然に振る舞うことが大切である。

C子については、学校が支援体制を整え、自然な態度で迎えることができたことで学級に復帰できた。

C子の変容

- 1 家族に対して自己主張ができるようになり、家族の集まりを好むようになった。
- 2 自分に対する自信が芽生え、「自分もやればできる」という肯定的な自己概念を形成しつつある。
- 3 学校の中で気軽に振る舞い、教室の授業にも参加できるようになった。
- 4 友達関係が深まり、学校以外で友達と交流することが増えてきた。



その後の対応

- 1 C子は、遅れた学力を取り戻そうと塾に通うようになった。学校においても、学力の補充をするために、放課後を使って教科担任による補習を行った。
- 2 担任は、C子に作詞・作曲のコンクールに参加を誘い掛け、曲を出品させることで「やりとげた」という自信付けを行った。
- 3 担任や養護教諭は、C子が学校を休むことがあったとき、登校できなかったことを問題とするより「以前に比べて継続して登校した期間が長くなったね」と認めるようにした。

主なポイントの応用

ポイント①

1 思春期の心と身体

思春期は、第二性徴が始まる12歳前後から20歳前後の時期を言う。この時期は親から自立していくために、アイデンティティー（自己同一性）の確立が大きな課題になる。そのため、自分自身を見つめ、人との出会いや社会的な体験によって、自己の存在の意味や将来の目標を模索していかなければならない。そのときの子どもは、「自立することへの不安」と「社会に適応していくことへの不安」で心理的に不安定な状態である。

乳幼児期に母親との信頼関係が確立されていないと、人に対する信頼が揺らぎ、人の反応が気になって不安感が強くなる子どもも見受けられる。その一つの表れとして、不登校もある。

<保護者の対応>

- (1) 保護者が、ありのままの自分を出し、互いを理解することが、新たな信頼関係を築くことになる。
- (2) 子どもが感じていることは、本人にとっては真実である。子どもの言うことを否定せずに受け入れてあげることが大切である。

<学校での対応>（担任や養護教諭など）

- (1) 子どもの心理的不適応感を軽減させ心理的な安定を回復する。
- (2) 子どもの体験や感情を明確化させながら自己概念を見つめさせ、変容を図る。
- (3) 子ども自身が現状を受け入れ、自分の問題としてこれからどうしたいのかを話し合う。

2 中1生徒の不登校の予防的対応

C子の事例のように、中学校1年生時に不登校になる子どもたちの中には、小学校において不登校の経験をもつ者が多い。小学校での子どもの状況を把握していないために中学校での対応が遅れ、長期間の不登校になることもある。また、小学校時の不登校経験者にとっては、中学校進学時に合わせて登校したいと考えることの多い時期である。せっかくの彼らの意欲を損なわないためにも、学校でできる不登校の予防的対応の取組をする必要がある。そこで国立教育政策研究所生徒指導研究センター「中1不登校生徒調査（中間報告）」（2003）から、予防的対応のための取組の中学校における主なポイントを挙げる。

(1) 基礎的情報の収集

新1年生の全生徒について入学以前の段階で、小学校4～6年生時の欠席状況について情報を提供してもらう。情報提供をしてもらう際には、「不登校」以外の理由による長期欠席や、いわゆる「別室登校」についても知らせてもらう必要がある。そして、そこで得られた情報は、学級編制や学級担任の決定の際に考慮する。

(2) チームによる対応

欠席理由の如何によらず、欠席日数の少ないうちに、その生徒のための対応チームを速やかに発足させる。これは、生徒指導主任、養護教諭、学級担任、スクールカウンセラー等から構成される。そして、休み始めた時点からの本人や保護者との対応、その反応等について記録をとっておく。

(3) 対人関係の改善

対人関係の改善では、人とのかかわることの苦手意識を克服させたり、他人との関係の中で自己の存在を感じとらせたりすることが求められる。例えば、他人と協力して作業をするような機会や場の設定をする。また、小学生との交流、職場体験活動、異学年交流などの機会を活かして対人関係の改善を図り、自己有用感・自己存在感を生徒自身に感じとらせるような教育活動をする。

(4) 学習面の改善

「分かる」という充実感や達成感を与え、学習指導要領に示す基礎・基本を確実に身に付けさせるようにする。

ポイント③

学校への誘い掛けを行うタイミング

- ・ ある程度安定して多少の負荷を引き受けられるようになっている。
- ・ 表情が明るくなり、退屈して気持ちが外に向き始め、外出できるようになる。
- ・ 学校の話題を出しても、激しい拒否がなくなる。

2 援助チームシート

生徒指導係会などで生徒の援助方針等を定める目安や、保護者との教育相談に活用できるものとして援助シートがある。C子の事例では、生徒指導係が中心となり校内の支援体制が整えられている。そこで、C子を基にした事例で援助シートを作成すると次のようになる。

援助チーム シ ー ト

第2回 平成〇年4月〇日

児童生徒氏名 C 子 担任氏名 M 先生		学 習 面 学習状況 学力 など	心 理 ・ 社 会 面 情緒面 人間関係 など	進 路 面 得意なことや趣味 将来の夢や計画 など	健 康 面 健康状況 身体面の様子 など
情報 の ま と め	いいところ 子どもの自助資源	・ 英語塾に通い始めた ・ 詩を書くことが好き ・ 作曲に興味をもっている	・ お菓子づくりが好 き ・ 家族に対して自己 主張する	・ 料理の勉強がした い ・ 高校には進学した い	・ おおむね健康
	気になるところ 援助が必要なおこ	・ 全体的に学習の遅れ を気にしている	・ 友達に気を遣い、 誘われると断れない ・ 安心できる場で人 とのかかわりを拡大 する	・ 希望する高校に行 けるか心配してい る	・ ときどき足の痛みを 訴える ・ 風邪を引きやすい
	してみたこと 今まで行った・今行っ ている援助とその結果	・ 好きな教科への誘い	・ C子のよさを見付 け誉めたり認めたり して自信付けを行 った	なし	・ 保護者に病院へ連れ て行ってもらった ・ 部活動への誘い
援助 方針	この時点での 目標と援助 方針	1 C子の希望する居場所づくり 2 好きな教科や部活動への誘い 3 友達に対して自分の気持ちを言語化することの必要性を促す			
援 助 案	これからの 援助で何を行 うか	①作詞・作曲コンク ールへの誘い ②参加できる教科を聞 き、教科担任との連 携 ③特別教室での学習の 推進	①C子の作詞・作曲 の歌を発表する ②C子と面接をする ③部活動へ誘い、部 員と交流させる ④断ることの大切さ を理解させる	①C子の得意なもの を将来の夢につな げる ②高校生活の楽しい イメージを膨らま せ希望をもたせる	①家庭でスポーツを行 う（卓球・ウォーキ ング） ②休日等の対外試合に 誘う
	誰が行うか	①担任 ②担任・教科担任 ③担任・教科担任	①担任 ②養護教諭・心の教 室相談員 ③部活動の顧問 ④担任	①担任・養護教諭・ 心の教室相談員 保護者 ②担任・養護教諭・ 心の教室相談員 保護者	①保護者・姉 ②部活動の顧問
	いつからいつ まで行う か	①6月ごろ ②学級に復帰できるま で ③学級に復帰できるま で	①随時 ②保健室や相談室に 来室したとき ③休み時間や放課後 ④随時	①保健室や相談室に 来室したとき 休み時間や放課後 ②保健室や相談室に 来室したとき 休み時間や放課後	①随時 ②随時

※ 援助案の欄の見方（例）

「これからの援助で何を行うか」→ ①作詞・作曲コンクールへの誘い

「誰が行うか」→ ①担任

「いつからいつまで行うか」→ ①6月ごろ

と言うように、縦の番号で見ていく。

【参考】石隈利紀・田村節子『チーム援助入門 学校心理学・実践編』2003 図書文化を参考に作成